

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



堀合富士子さん
昭和4年3月5日生まれ。
音更町北宝来2区在住

幼少期・学生・就職

私

は昭和4年、土幌町の中土幌市街で商店を営む父母の次女として生まれました。

小学校の頃は、休み時間に編み物をしたり、担任の先生の家へ友達と遊びに行ったりしていました。小学校卒業後、北海道庁立帯広高等女学校（現帯広三条高校）に入学し、朝6時頃の土幌線の列車で通学していました。

学生の頃は、戦時下にあつたため、農家への勤労奉仕や防空壕への出入り訓練、ミシンで兵士の戦闘帽や下着の縫製などもしました。

学校卒業後、中土幌小学校に奉職。戦後の食糧難と凶作で主食は「とうきび」や「じゃ

がいも」でした。特に、終戦で外地から引き揚げてきた子どもたちは、学校に弁当を持参できない子も多く、私は、クラスの子どもたちと話し、みんなで分けあうようにしました。その後のクラス会では、「先生が昼ごはんを分けてみんので食べたことが一番うれしかった」と教え子が語ってくれました。

結婚・子育て・

社会的活動

昭

和26年、22歳で結婚。夫の業家は、木野市街で鉄工所を営んでいました。

主人は、いつも一生懸命に仕事に打ち込み、休みなく働く人でした。

3人の子宝に恵まれ、子育てが一段落した昭和48年に、北海道の事業として始まった「道民の船」に参加しました。大型船に乗り、道内の市町村から集まった人たちと約1カ月間の船上研修生活を送りました。国内はもとよりアジアの各港に立ち寄り歓迎を受け、国際交流も経験できました。帰町後、「何か社会の役に立

ちたい」という思いから、女性4〜5人で高齢者へ食事を届ける「つきみ草」というボランティア組織を立ち上げました。食事を届けに何うと、皆さん笑顔で待っていてくれる、その姿が私たちの喜びでありやりがいとなっていきま

した。また、更生保護活動にも携わりましたが、少年院を訪問するたびに、こんな素直な子がどうしてという思いと、どうか立ち直ってほしいと願うことばかりでした。

このような社会的な活動の中で感じたことは、相手の立場に立つて思いやる心が大切だということでした。

生きがいのある

人生を

長

女がまだ学生の頃、私に言いました。「頼りになり、誰からも信頼される母親になつてね。何を聞いても分かるような人生の経験を積んでほしい。そのためには積極的に社会に出て人生経験を積んでほしい」この言葉に私は驚きました。



楽しく続けている趣味のお茶

努力する毎日の母親の背中を子どもたちは見えています。子どもたちから学ぶ事も多く、親子の「きずな」を大切にしたいと思います。

私は今年84歳。毎月、女学校時代の友人との食事をしたり、茶道を40年来続けています。これも多くの仲間のおかげで、これのことと生きています。どのような活動でも、それに参加し、多くの経験をすること、たくさんの人に巡り会うことができ、それが自分の元気の源や財産になっていくものです。人生にとって「生きがい」はとても大切なものです。誰もが「生きがい」を感じる人生を過ごしていけるよう願っています。